

小児病棟で笑顔引き出す



健康のページ

◆遊びのボランティア
昨年1月に設立された「全国小児病棟遊びのボランティアネットワーク」には、東京や京都、神奈川、愛知、沖縄などの16の団体・個人が登録されている。活動内容などは同ネットワークのホームページ (<http://www.asobivolnet.com/>) で公開している。



病室のベッドにおもちゃを運んで、子どもと遊ぶボランティア(右)。感染予防のため、使い捨てのガウンやマスクを着用している(国立国際医療研究センターで) —赤津良太撮影

付き添いの親にも安らぎ

子どもの心身の成長を促す「遊び」。小児がんや重度障害などで長期間の入院を強いられる子どもたちにとって、遊び相手の存在は特別だ。高度医療の現場で、ボランティアがその役割を担っている。

(赤津良太)

遊びのボランティア



今月6日、東京都新宿区の国立国際医療研究センター。「次の遊びを早くやらう。ボランティアさんは」。滅菌したクリーンルームで過ごす男児(6)の部屋から、大きな声が聞こえた。クリスマス飾りを作った

後はカードゲーム。残り時間は30分。初めて会った学生ボランティアにルールを教えながら、先を急ぐ。「勝ったあ」。笑みが浮かぶ。遊び相手を務めるのは、「病気の子ども支援ネット

遊びのボランティア」のメンバー。同センターで毎週土曜の午後2時から90分、小児病棟の病室やプレイルームを訪問する。長期入院の場合は、平日に個人訪問もしている。現在、保育士や教師、学生など約60人が登録。土曜だけで年間約50回、延べ約600人と遊ぶ。設立は1991年で24年目を迎えた。2006年5月にNPO法人になった。同法人理事長で保育士の坂上和子さん(60)は、「高度医療が必要な子どもたちを訪問看護した時、一人で泣いている姿を見たのが活動のきっかけ。同センターで約15年間、遊びのボランティアの活動を見てきた小児科医の山中純子さんは「ボランティアのおかげで長い入院生活をがんばれた」という声をよく聞く。小児病棟になくはない存在」と目を細める。

坂上さんらは毎回、何を遊ばせたいか、どんな様子だったかなどを記録して、看護師らに渡している。不慮の事故や感染症などを恐れ、ボランティアの受け入れに慎重な病院もあるが、こうした地道な積み重ねで信頼を得てきた。坂上さんは「子どもはどんな状況でも遊びが必要。活動の理解者を増やしていきたい」と話している。

親子に支援が必要だと思っただけで力を入れている。そんな東京都在住の加藤由紀子さん(42)は、生後11か月の長男が約7か月間、急性骨髄性白血病で同センターに入院した。抗がん剤治療を受ける長男に毎日、泊まり込みで付き添った。3か月が過ぎて精神的に行き詰まっていた頃、遊びのボランティアに平日も来てくれるよう頼んだ。

以来、週2回各90分、複数のボランティアが交代で訪れる。ベテランの保育士もおり、触ると音が出るもの、指先を使うものなど、